

手漉き和紙のできるまで

現在ただ一人、宮地和紙を漉している宮田さんの作業の様子(2002 年時)を紹介します。



原料は、カジ（楮）。
皮の状態のものを購入しています。



カジは、一晩水に漬けます。
家の前には水無川の支流が流れていて、その川の水を使います。



前の晩に川に漬けておいたカジを苛性ソーダで
4 時間ぐらいかけて煮ます。
苛性ソーダで煮ることによってカジの繊維以外の
不純物が溶けやすくなります。
1 回分のカジは 8 貫。1 釜分で 700 枚ほどの紙が
漉けます。
※1 貫＝約 3.75 k g



煮た後のカジを 30 分ほど水に漬けると茶色の汁
が出てきます。きれいにすすいでコンテナに入れて
半日かけて水気を切ります。



晒し粉を使って漂白をします。夏は 1 日半から 2
日、冬は 2 日間ほど漬けておきます。
あまり長く漬けると繊維が弱くなり、破れやすい
紙になってしまうので、その加減が難しいところ
です。



晒した原料を網の中ですすぎ、ごみなどを取り除きます。丁寧にしておかないときれいな紙はできません。



原料を棒で叩いた後、ビーターに入れて原料の繊維をほぐします。時々手で触ってみたり、水を入れたバケツに原料を入れて混ざり具合を見るなどして原料のほぐれ具合を確認めます。ビーターにかけおわった原料は、コンテナに入れます。その後晒し粉を完全に抜くためにしっかりとすすぎます。



水を入れたフネと呼ばれる桶に原料を入れ、棒でかき回します。



マガと呼ばれる農具の馬鍬によく似た道具でかき混ぜます。



ノリ（ネリ）である黄蜀葵（トロロアオイ）から出た粘り気のある液体を晒しでこして入れます。

※黄蜀葵は、根の部分を叩いて2～3日水に漬けておいたものを使います。10本漬けておいて冬で1週間、夏で3日程もつので途中で水を足しながら使います。



紙を漉きます。1回で漉ける量は、紙の厚さにもよりますが、障子紙で50枚ほど。

気温が高い時は、ノリ（ネリ）がきかなくなるので急いで漉きます。



竹の棒に紐をつけて桁（けた）に結び付けています。この竹の弾力を利用して紙を漉きます。



漉き終わったら、紙の端にビニールの紐を挟みます。これは、乾燥のとき、1枚1枚の紙をはがしやすくするためです。

※以前は、ビニール紐のかわりに七島藺を針で細く裂いたものを使っていました。



桁から簀をはずし、簀ごと持ち上げて前に漉いた紙の上に重ねます。



重ねた紙に圧力をかけて水分を取ります。半日かけると紙が半乾きになります。



水分がある程度取れたら、竹竿を使って紙を一枚ずつはがし、乾燥機に刷毛で貼り付けてかわかします。乾燥機には各面に 3 枚ずつ貼ることができます。



障子紙の裁断をしているところ。150 枚を一度に切ります。足の下板は、縦に 2 分割できるようになっていて、周囲を切り揃えて、片方の板を外して真ん中を切ると障子紙 1 束分（300 枚）ができるようになっています。